

### パンチョ・ビヤ、チワワ州知事になる

12月1日、規律正しく統率の取れたビヤ軍最初の部隊がチワワ市に入り、その数時間後ビヤが到着した。人々は沿道に並び「ビバ・ビヤ、ビバ・カランサ、ビバ・ラ・レボリューション」と歓呼して迎えた。治安維持に当たった二百の連邦兵士は手厚く扱われ、進退は彼等の自由にさせた。多くのビヤの兵士たちにとって、州都に勝利して入るのは、これが二度目であった。1911年には一人当たり五十ペソと馬一頭を貰ったが、今度はそれだけでは満足しないはずであった。<sup>42</sup>

チワワの状況は複雑で危機的であった。チワワの南ではウエルタの連邦軍精鋭部隊を率いるジェネラル・ホセ・レフヒオ・ベラスコがトレオン奪回に成功していたし、チワワ北東のオヒナガでは州都守備隊長であったメルカドが三千五百の兵を集結させ、ベラスコとの共闘作戦の機会を窺っていた。鉄道は到る所で破壊され、主要幹線も使えなかった。米国企業は操業を止め、チワワ州は失業者で溢れていた。それまで流通していた紙幣は、上流支配層に持ち出され、人々は銀貨のみに頼っていた。バンコ・ミネロが発行した紙幣は、新しい政府が引き受けるとは考えられず、誰も受け取らなかった。三年前、州民全てがテラサス、クレエル、ディアスに反対していたが、この年、貧困層はオロスコ支持、中間層はビヤに恐れと不信感を抱いていた。ビヤは一万の兵を維持しなくてはならなかった。1913年12月、このような状況下でビヤはチワワ州知事に就任した。読み書きがやっと出来て、経験の全くないビヤが敢えて知事を引き受けたのは、法の執行者となる満足感のためなのか、あるいは、彼が不信を抱いていたカランサが、チワワの政治的実権を握ろうとしていたのに対抗する狙いがあったのか、想像の域を出ない。<sup>43</sup>

ビヤはエル・コレオ・デ・チワワ紙の発行者シルベスター・テラサスを補佐官に任命し、マデロ＝ゴンザレスの政策を百八十度転換した。テラサス＝クレエルの排除に取り掛かり、まず与えられていた特権を取り上げ、彼らに高率の税を課した。大農園の土地を接収し、所有者を州外へ追放した。放牧されている牛を屠場へ回し、肉を安く、広く分配した。ビヤの就任から二三週間後、これ等前例のない政策で、オロスコ派は続々とビヤ支持に回った。<sup>44</sup>

12月9日、ビヤは政令を布告、スペイン人を追放し財産没収を命じた。これに最初の抗議をしたのはスペインを代表している英国領事スコベルであった。チワワとトレオンに駐在する米国領事も抗議し、最後にワシントン駐在スペイン大使の要請でアメリカ政府が介入した。ウイルソン大統領は、国際的に悪評を蒙ったら、革命軍を支持できなくなることを恐れた。スペイン人はよくメキシコに溶け込んで、国の発展に寄与している、とシルベスター・テラサスもビヤを宥めたが、ビヤは折れなかった。ウエルタに権力を握らせたのはスペイン人であり、マデロが暗殺されたとき各州でスペイン人は祝宴を挙げた、とビヤは言った。スペイン人がマデロに対するクーデターを支援したのは間違いのない事実で、

フェリス・ディアスの部下には十四人のスペイン人がいた。チワワ、ドゥランゴやトレオンにいたスペイン人は殆どがウエルタ支持者であった。ビヤがスペイン人を槍玉にあげたのは、スペインの国力が弱かったのと、アシエンダの持ち主や、管理者にスペイン人が多かった為でもある。後にビヤは折れ、ウエルタ支持を止める事を条件に、彼らの帰還を赦した。<sup>45</sup>

テラサス＝クレエル一族の中でルイス・テラサス・ジュニアーだけがチワワ市に残った。彼は外交特権のある英国領事官に身を寄せていた。シルベスター・テラサスに届いた密告によると、彼は州政府要人やビヤ自身を買収するために残っているとのことであった。彼等はオロスコを買収した実績があり、山賊ビヤは容易に金で動くと考えたのは、ありそうなことであった。家族の命に従って残り、財産の保全にあたらされたのか、あるいは自ら計画したものか、いずれにせよ誤算のため、莫大な財産を失うことになった。外交特権を無視したビヤは領事館に踏み込んでジュニアーを逮捕した。一族は銀行から金を全部持ち出す時間的な余裕はなかったはずで、まだ多額の金が残っているとビヤは見抜いていた。事実建物の円柱の中に五十九万ドル相当の金が隠されていた。重役の一人であるテラサス・ジュニアーが隠し場所を知らないはずはないとビヤは思った。最初は優しく説得に努め、同じ上流社会の出で、ビヤに加わったばかりのフランシスコ・マデロの弟ラウル・マデロと一人の技師を説得に当たらせ、最後には自ら尋問にあたった。しかしジュニアーは、金は無いので渡しようが無い、と言うのみであった。<sup>46</sup>

ある晩一時過ぎ、ビヤの将校二人がジュニアーを房から車で連れ出し、大きな木の下まで連れて行き、鞭打ってから首に縄をかけ木に吊るした。気絶したジュニアーが三時間後蘇生したのは房の中であった。喉が真っ赤に腫れて話す事も水を飲むことも出来なかった。翌朝現れた二人は、まだチワワに居る母、妻、娘たちの命を奪うと脅した。彼は家族の命と引き換えに、バンコ・ミネロの金を渡すことにした。しかし約束は守られなかった。テラサス・ジュニアーは正確にどの柱に隠されていたか知らなかったため、探索にあたったラウル・マデロとビヤの秘書ルイス・アギレ・ベナビデスは六七時間も探してやっとクレエルが隠した金を見付けた。彼等はビヤのもとへ金を届けた。金は金庫に納められたが、ビヤは一部を将校たちに分配した。ジュニアーは貴重な人質として二年近くも捕らわれの身であったが1915年の暮れ、脱走に成功し、アメリカの家族のもとに帰ったが、監禁によるストレスのため間もなく亡くなった。<sup>47</sup>

1914年1月7日、就任後僅か四週間ほどでビヤはカランサの提言に従って、知事の席をマヌエル・チャオに譲った。トレオン攻略を控えて両方を務めるのは無理であった。ビヤは富裕層から最大限の搾取を行ったが、彼の兵士や貧困層が盗みや掠奪をするのを厳しく取り締まった。ビヤはアメリカとの関係で不和を招くような行為は厳しく取り締まり、逆にチワワ在住アメリカ人の財産を守ることでアメリカ政府から信用を得るようになっていた。アメリカの治安当局は武器の禁輸を大目に見ていた。そして1914年3月、ウイ

ルソン大統領は武器禁輸を解除し、合法的に輸出が出来るようにした。四週間チワワを統治したことにより、ピヤは短期的には素晴らしい成功を収めた。あらゆる資源を掌握し、規律を守らせ、掠奪による被害を最小限に止めた。支配層から土地財産を没収し、貧者に分配して多くの支持を得た。多数を占める中産階級の感情を十分に理解し、彼らにも恩恵を与え、支持を得ることに成功した。<sup>48</sup>

42. Friedrich Katz, "The Life and Times of Pancho Villa", Stanford University Press, 1998, P229

43. Ibid. P232

44. Ibid. P233

45. Ibid. P235

46. Ibid. P244

47. Ibid. P246

48. Ibid. P249